

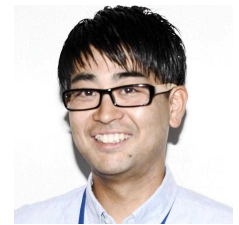
特定非営利活動法人 未来（鳥取県倉吉市）

# 「地域と子どもの未来を創造」 ウォーキングで地域ブランディング

特定非営利活動法人

未来  
事務局長

あさだ ゆういち  
麻田 雄一



## 1. 倉吉市の概要

倉吉市は鳥取県中部に位置する人口約5万人の都市。シンボルの「打吹山」には天女伝説があり、ふもとに広がる古い町並は、江戸～明治期の家屋や土蔵が多く残り、国の重要伝統的建造物群保存地区として指定されています。「赤瓦」などの観光施設や白壁土蔵群へ年間60万人の観光客が訪れています。また、中山間地域は、大山(だいせん)などの雄大な山々を見渡せ、「日本の名湯100選」に選ばれた関金温泉やわさびの育つ清流など、豊かで美しい自然・田園風景が広がっています。



## 2. 活動開始の背景・経緯

### ■子どもたちが「うちの地元には何もない」と悲観しないために

特定非営利活動法人未来の原点は、地元のPTA会長同志の集まり。1990年代後半、首都圏への人口一極集中が加速するなか、人口最少県の鳥取県に漂う「取り残されている感」は、子どもたちの精神にまで影響していました。「都会と比べたら、地元には何もない」という悲観的な考えが固定観念となり、都会型へ一直線の発展を単純に夢見るような風潮から、地域の良いもの・誇れるものを見直し、子どもたちに誇りと自信を創出することが必要だと考え、「地域の未来そのもの」である子どもたちのために、今わたしたちができることをやろう、と始めました。

### ■異業種・多彩なメンバー

PTA会長の集まりでしたから、職種は多彩でした。後に理事長になる発起人の岸田は、地元ショッピング

センターの役員で、倉吉商工会議所の常議員。同じく副理事長の松田と遠藤は、それぞれ小児科医と土地家屋調査士。専務理事の讃岐は、建築士。様々な専門的スキルと、それぞれが有する広範で異業種のネットワークが、後の活動拡大に大きく寄与しています。

### ■自分の住んでいるまちを、まずは歩くことから

2000年に初めてウォーキングイベントを開催。親子連れの参加が多く、「普段親子で一緒に体を動かすことがないので、良かった」「歩きながら子どもと何時間も話すことができた」「身近に歴史的で貴重なものがあるとは知らなかった」という声をいただき、ウォーキングを通じた親子の絆の再生、地域資源の再発見等の可能性を体感しました。2001年より、現在まで12年12回続く「SUN-IN 未来ウォーク」を開始しました。

### ■現在の活動視点とウォーキングの有する価値

地域に個性がない時代はまだ続いています。全国のまちを旅しても、ほぼ同じような景観が展開しますし、行政も同じような施策ばかり。移住希望者が地域を選べない、選ぶべき個性がない、とも言われています。わたしたちは常に、倉吉市の中で全国的に勝負できるレベルの個性を取り上げ伸ばしていくという視点を強く意識しています。全国的に見て中途半端なものは、他地域の模倣で始まったものが多く、その時代(世代)限りの、地域住民の自己満足で終わる可能性が高いため、活動を無理に継続する必要がないからです。その点、当地域の「ウォーキングを通じた地域づくり」は全国的に珍しく、地域の個性を創造できる素材であると確信しています。

## 3. 活動内容の詳細

### ■SUN-IN 未来ウォーク



2001年より開催しており、現在では全国3,000以上のウォーキング大会の中で最高峰のリーグ「JML」に加盟している全国唯一の民間主体のウォーキング大会。本年の大会では、全国42都道府県から1,400泊以上の宿泊者に来県いただき、倉吉のウォーキングを満喫いただきました。大会に参画する実行委員会ボランティアは30名以上、当日に関わるボランティアの数は毎年500名以上、その多くは高校生と大学生です。

### ■鳥取県ウォーキング協会の設立

2005年、鳥取県ウォーキング協会を設立し、地元の歩こう会、てくてくクラブ、また大学教授や医師等のウォーキング専門家との協働が実現。県内の様々なウォーキング大会のプロデュースや開催支援を実施。

### ■ウォーキングの5K



日本ウォーキング協会の提唱によるウォーキングの5Kは、「健康」「観光」「交流」「環境」「教育」の5つの効用を示します。この各視点と、基本理念「地域と子どもの未来を創造」を組み合わせ、日頃のわたしたちの活動を深掘りし、評価し、これからの施策づくりの指針としています。

### ■ウォーキング立県

2009年、鳥取県知事・日本ウォー

キング協会・韓国の大韓ウォーキング連盟の鼎談を設定、ウォーキングによる地域づくりを推進していく「ウォーキング立県」宣言を実現。以後、県や県内自治体とのウォーキング関連事業の協働が進みました。

#### ■19のまちを歩こう

県内すべて19の市町村でウォーキング大会を開催し、県内全域で歩く文化を醸成する施策として、2010年度より実施し、2011年度で全市町村での開催を達成しました。

#### ■ケータイで健康ウォーキング「とりっぽ」

携帯電話を使って日々のウォーキングを記録し、ウォーカー同士で記録を競い合う「とりっぽ」という事業を鳥取県に働きかけて2011年度より実現。県民の歩数向上と健康づくり、そして町を歩くことによる様々な効用を期待しています。

#### ■ウォーキングリゾートの創造～日本初のウォーキングカフェ「Café ippo」の開設・運営



東郷湖畔を中心とした倉吉エリア一帯を「ウォーキングリゾート」(造語)と呼んで地域づくりを集中的に行うべく、その第一歩となる拠点として日本初「ウォーカーのための」コンセプトカフェ(飲食機能、物販機能、地域資源PR機能)を2012年8月より開設・運営しています。韓国観光AGT等からも注目され、観光商品造成に向け始動しています。

#### ■全日本ノルディック・ウォーク連盟鳥取県支部の設立・運営

ノルディック・ウォークは全身の90%以上の筋肉を使う運動として、足腰の負担が少ないリハビリとして医師も推奨する新しいスポーツ。2010年より当連盟支部を運営しています。

#### ■日本ノルディック・ウォーク学会の設立総会

全国的に先進地と認知された結果、2012年には全国から教授等の研究者が100名以上集結して、日本初の学会が当地で設立されました。未来の松田副理事長が、当設立総会の大

会長と学会の副会長に就任し、以後、学術的なアプローチを深めます。

#### ■グローバルな視点がローカルに繋がる

地域を国際的視点で強くブランド化することと、子どもにとっても「世界と繋がっている」ことを意識し誇りを持ってもらうため、世界のウォーキング産業を牽引して新しい市場を創造するため、わたしたちはグローバルな活動を展開しています。

#### ■韓国江原道原州市「韓国国際ウォーキング大会」との交流

2日間で20か国以上、4万人以上が参加の「韓国国際ウォーキング大会」と市民交流を深め、2004年に協定を締結し、以後毎年互いの大会に30名規模の参加を続けています。

#### ■日韓ピースウォーキングの開催



2010年、韓国原州市からウォーキングを出発し、日本海をフェリーで渡り境港で入国、そこから倉吉市まで歩くという国境をまたいだウォーキング大会を開催。国境・海をまたぐウォーキング大会は世界初、両国の参加者は深い感動を共有しました。3年に1度の継続を予定しています。

#### ■済州島「World Trail Conference」、韓国観光研究学会への参加



2011年より、わたしたちの活動が韓国のウォーキングツーリズムを牽引している済州島に注目され、世界11か国で構成する世界会議「World Trail Conference」(世界道会議)に参加しています。今後、日本開催を招致すべく活動していきます。

#### ■インドのウォーキング市場創造

2011年、インドからの誘客と現地ウォーキング市場の創造を企図し、インド最大のウォーキングイベント「DELHI HALF MARATHON」に参加。イベント主催者との協議で、今後日本

との共同企画を推進していくことや、インドのウォーキングコースを紹介するWebサイトを共同で立上げること等を確認しました。

#### 4. 課題と展望

#### ■改めて、地域のグランドデザインを描くこと

当地域がどうなっていくべきか、誰が担い手でやるべきかは、政治や行政が考えるだけでなく、あくまで民間の自分たちこそが描くべきではないでしょうか。地域のグランドデザインを自分なりに描き、周囲にわかりやすく伝えて協力体制を整え、実践することが大切だと考えます。

#### ■ビジネスモデルの創造による新しい市場の創造

民間企業が当分野(ウォーキング等の地域資源を活用した事業)にどんどん進出し、自発的にマーケットを大きくしてくれるようになることが、自律的な地域づくりの最終形だと考えます。そのために、まずはNPOや行政が、ビジネスモデルを創造して模範となる必要があります。

#### ■上記を実現するために必要な諸資源の確保

活動資金のさらなる確保、優秀なスタッフのさらなる確保と育成、ボランティアスタッフのさらなる確保と育成をクリアすることが必須です。

#### ■そして、共助の風土の醸成へ

NPOの社会的な存在意義とは何でしょうか。社会には、単なる営利企業ではできない・やらないことや、行政ではできない・やらないこと、が確実に存在します。社会課題があつて社会に必要なのに、解決策が専門的であり、かつ、対価を得るモデルが未だ確立していない領域。この領域が、NPOがモデル的に活動する場所だと考えます。そしてそれぞれのモデルを確立した後は、地域内で次の実施団体/法人や世代にしっかりと事業を引き継ぐ。これが社会変革の先鋒(パイロット)としてのNPOの重要な役割と考えています。このような、各セクターの社会的存在意義や役割分担の必要性を、情報発信を通じて多くの人に理解いただき、当圏域に共助の風土を醸成することで、「地域と子どもの未来を創造」することが、わたしたちの夢なのです。